人生の断片（第一回）

何か人生についての話を、というのですが、そういった話は、私のまったく苦手とするところなので、何回かお辞したのですが、中々お許しが出ないので、全く困っているところなのです。

私は、もう満69歳を越した老人です。私の生涯は、一口でいえば、ながい間の学究生活であったといえよう。20代のころ、数年間家業に手伝ったことがあるばかり、その外は大体書斎の生活を長く学校・研究所・つづけてきたわけの人間です。生活や学問を戦い取るといったような、やらなかった、花々しい実際の人生から人生を学んだというよりも、書物の上から人生を学んだ方が、多いような人間なのです。大した苦しみもせずに、どうやら今日まで生き延びた人間。

個人的にも学問的にも社会的にも、あまり一人の平凡な人間として

しかし書物から学んだとしても、大部分は古人の假りものに過ぎない。それはありていにいえば、書物の上からは、どうしても学び得がたい大きな面がある。そういう面は理性として、

人生の一

人生にとって本当の力にならないでしまうことが多いのだ。

学問や思想や教育とか何の関係もない仕事といえば、

そんなこと

することも容易でないが、また理解し

の中

頭で理解し たところで、私を役に立た

ないだろう それは実際の人間の感情として、人間的感覚として、

心の底に根をおろしたものでなければなら

い。今日はそのような一つの実例として、

自分の最近の経験について申上げます。

——まだ終り切らず、

その過程のなかにある、

いまだ なまなましい

一つの経験——

この話は、で

くやさしい、わか

りやすい話ですが、

話の性質上、ただお聞き流しにしないで下さい。

私は一昨年の初夏とこの春に、自分としては一つの珍らしい経験をした。私は太平洋戦争の半ばごろから、冬から初夏にかけて十年ばかり、いつも病床に暮した。それで私は花も若葉も眺めることは出来なかった。

年に歳々花は どんなに美しく咲いても、若葉の匂い どんなに かぐわしく、十年間も眺めることは出来ない

しかし一昨年だけは、春の半ばごろからようやく起きあがって、若葉の匂いをかぐことが出来、若葉の美しさを十分に味わうことが出来た。新緑の下で、私はわかわかしい青春の息吹きを吹きこまれたのである。

それは全く思いがけないほど私を若返らせてくれた。

病後の私は、戦後の民主革命の曙が来たかと思われたほど、永く病床にあって活動することも出来なかった私、この頃になって逆コースの時代に入ってからは、何一つ仕事も出来ない不安定の時代に、憂鬱しきって、生きているというだけの私であった。

交動を食いとめるなんぬも書くことも出来ない

このように行き詰まり、人生に絶望を感じはじめた私は、かぐわしい若葉の息吹きによって、ようやく生き甲斐を覚えてきたのであった。

知らず知らず これまでとは異った コースを辿っていた。これまで20年以上やってきた歴史の研究から、いつの間にか段々と離れて、人の生き方、人間性の探求とでいった方へと、

来る年も来る年も寝てばかりいた私、そうしている間に意気も萎えはて、だんだん人生に絶望を感じはじめようとしていたのであった。

そういう私は、いまここで ようやく蘇ることが出来た。

でくだい大部分は陰い手離してしまった。それで

それに

仕事には、よろやく明るくなりかけてきたし、[redacted]、もし新しい道に踏みだしたなら、それで気分を刷新し、新鮮な気分になって若返ろうとしたのであった。

私は

しかも長い間の病床で、知らず知らずのうちに、半生の回顧を省み、そういうことを教えてくれたようだった。これまでの考え方や思想や行動には、とかく理性的な面ばかりが目について、冷たい洗練された感情をつつんだ面が著しく欠けている。もしパスカルの有名な言葉を用いるなら、従来の私には幾何学的精神ばかりがつよく現われていて、繊細の精神を欠いていたのではなかろうか。いまこそ人生の終りに近い私は、最後の情熱を傾けて、こういう繊細の精神を、人間の生き方を探求しようとしたのです。

仕事の過労のため、一昨年の終りから昨年の初夏まで、半年以上も寝込んでしまった。昨年はついに新緑さえも眺めることが出来ないでしまった。

このようにして私は文学芸術に深い興味を寄せ、ことに従来あまり関心をもたなかったロマンティシズムの文学をも読みあさるようになったが、

B4 20×20

5—④

~~人生の断片~~

ところが、幸いも、夏に入って元気が出てきて、私の暮しからは健康も怪後しはじめた。そして

左ほど、洞穴がいいのである。

~~あったといえる~~ 今年に入っては、は まったく不思議にも、~~月から~~ ことし春分の日から殆ど毎日起きていて、コブシの開きはじめるころから新緑の今日までで、二個月ばかりの間、花と若葉の世界を静かに眺めて暮すことが出

また。それはかりか、私は春の休みに桜の花さく五日間を孫たちを連れて伊豆の温泉で暮すことが出来た。春の旅一春の旅ということは、戦後の私にとっては、年々~~病的~~困難になるしめられて来た私に取っては、春の旅は全くと病いのない喜びであった

それは全く十年以上に亡くなって見られなかった現象であった。

奇跡のような

このような~~雰囲~~精神的雰囲気の中で私は春を

~~見ては花も見た。八重つばき、八花さく、つわ、ぼけ、山吹、木蓮、~~

~~日本の~~ ~~神国の~~ ~~というもの~~

~~これはどれも花は、春は美くしいものであったが、~~

~~これが偽らない私の成長であった。~~

~~私の~~

日比谷にて、

B4 20×20

花を見つめたり、若葉の香いを嗅いだ。— 庭前の白いコブシや、黄色い菫の花畑や、櫻のトルネルや、咲きほこる海棠や、春雨に散っていく梅や、いま咲いたばかりの乙女椿。また、ぷんにおう木蓮や枝もたわわな八重さくらや、みずみずしい葉のうすみどりや、くれない紅しぼりの大きな八重椿や、赤い蕾が燃えるつつじや、群がり咲く藤の花や、かぐわしい石楠花（シャクナゲ）や百日紅（サルスベリ）のあか紅みだいや、味を楽んだ　など。

こうしてた結果、花というものは、若葉というものは、春というものは、これほどまでに美しいものであったのか？— こういうのが、私の、俗らの動きした感想であった。

花と若葉を眺めくらした

大久保のつづき

今はじめて花を見たことでありません、

上野の桜や

もちろん私とても青年のころには花を見たこともあるし、二十代の終りには文学者先生と花見の酒を[redacted]で、人生の春を味ったことも、いくらかあった。しかしそれらのことは、人もするから自分もやって見たという程のものに過ぎない。そんなことで深く花を見、春を見たということには遠くなかったと思う。一口でいえば、今日まで自然の春を、本当には知らない過ぎてきたのだ。

春も知らずに大だ

長かく生きて来ただけであった、といえる。

考えて見ると、(私たちの科学をやった人間として)自然界の法則(整然たる)を いろいろと学んで来た。たとえば太陽系や惑星の運行についてのケプラーの法則とか、ニュートンの万有引力の法則とか、……そして自然法則の整然たるを見て、これを自然法則の美しさと呼んだ。そうして自然法則の美ということを観念的に捕えて来た。また数学[redacted]、どんな三角形を取ってきても、内角の和は二直角だ、といった、簡単な事柄を整然たる[redacted]。なるほどそういった意味での自然や科学の美は、観念的には理解される。それは自然そのものの美を直観的に

それでも

についていうなら、数学が極めて論理的に整然と描成されているのを見ては、これを数学の美しさと呼んでいました。

なるほど、どんな三角形を取ってみても、内角の和は二直角だということは、何ものっても不思議ほど厳密に正しい簡単な事柄であり、それは一見実際に当って見ないでも、その正しいことが証明されるのいうのだ。そういうことを、われわれは数学や科学の美しさというて来たのだ。

実証して見

埋えたことはならないであろう。じっさい私たちは望遠鏡によって天体を観測しながら、ケプラーの法則を見たことも、たゞ書物の上で、教えられたに過ぎなかったのだ。そういう意味で今日まで春や花の美さえも、十分に味いえなかったように私は、自然そのものの美などと、言うのでは、なかったであろう。いえ、いう資格がなかったのだ。

私は、長い病床から現実の日本を眺めて暮らし、原爆・水爆の恐怖の前におのゝきながら、軍事基地や向陣や言論自由の圧迫に、国民的な怒りを感じながら、微力を尽くしている私である。そして細々しい研究に物うくなって、人間の生き方の探求を志し、そういう私はようやく人生の黄昏に臨んで、花の匂いや若葉の香りや、晩春初夏の息吹きに打たれて、自然の美に驚いた次第であったのだ。

しかも私の見た花は、私の嗅いだ若葉は、日本の花であり日本の若葉である。この花を愛しこの自然を愛する心は、祖国日本を愛する心とつ

そういった意味で自然科学を学びながらも、自然の美を知らなかった

若いころは人生というものは、もっと簡単なものかと思っていたが、ますます人生の深さ、生きることの難さが、少しずつ解って来たような気がする。

と思う

なかるものだ。私などは幼少のころから花を見なれてきて、あまりに慣れ切ってしまったので、傳統の美くしさを忘れてしまっていたのであった。

却って日本の花の

それ（この場）理解させず、改めて全く十何年ぶりかに見ることが出来たので、人向的な新鮮を感覚したが喚び起されたのであった。

「さくらも、つばきも、木蓮も、藤も、色とりどりに咲いているけれど、われらの祖国はどうなのだ。もし日本の花に魂があるのなら、美くしい花たちは、祖国の壮麗を讃めて何と感ずることでしょう」――私は辛辣に、皆さんにお伝えしたいのであります。

てういった感情を

われわれ日本人の庶民的感情として、花の話から食べ物の話に移るなら、ビキニの水爆実験にやられたマグロがある。私はマグロの刺身やカツオの刺身を思い浮べながら、マグロの刺身につきものの、ワサビと、カツオの刺身につきものの、ショウガを連想する。西洋料理ばかり食べている人たちは、どうか知らないが、ワサビとショウガは香味料（やく味）として、日本料理に欠くことの出来ない傳統的のものである。日本の庶民生活の中からショウガやワサビを取り除くことは、考えられないことだと私は思っている。

皆さん、今日の日本では、国民の間から、平和と獨立を求める声がだんだん強く盛りあがって来ています。平和と獨立を求めるその声が、本当に力づよく国民的な抵抗運動をおこすには、どうしても、ただ理性に訴えるばかりでは不十分なので、それを国民的感情にまで結びつけなければならないのです。それには頭でわかるだけでは足らず、深い国民的伝統の下に、根をおろさなければならないと思う。

皆さんは私の話をどういう意味におとりに成って宜しいのであるが、只今私が申しました意味で、今日の話をもう一度ふりかえり、よくお考えになって下さい。